

2023年度第37回日本音声学会全国大会
2023.9.16-17@北星学園大学 & Zoom

南琉球与那国方言における 重子音化と無気喉頭化音の音韻解釈

中澤 光平
(信州大学)
kohein@shinshu-u.ac.jp

1. 本発表の目的

- 南琉球与那国方言には、南琉球諸語では珍しく(有気音と対立する)無気喉頭化音があることが知られているが、基本的に語頭でのみ有気音と対立し、語中の子音との関係など、音韻論的位置付けに議論が必要な点がある。
- 本発表では、与那国方言の無気喉頭化音について、発表者の現地調査データをもとに論じる。

[tʰ], [kʰ] <-> [tʰ], [kʰ] ? [-t], [-k]

発表の構成

1. 本発表の目的
2. 与那国方言について
3. 問題の所在
4. 調査と結果
5. 考察
6. まとめと課題

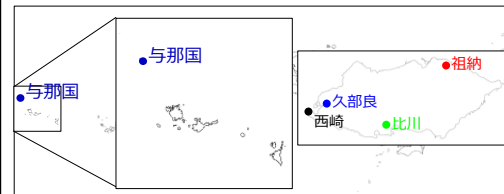
2. 与那国方言について (1/4)

- 与那国方言が話されている与那国町は与那国島の一島からなり、祖納(そない)、比川(ひがわ)、久部良(くぶら)の3つの集落がある。面積は28.96km²で人口は1,673人(令和5年7月末日現在)*。

*与那国町役場「人口と世帯数」(<https://www.town.yonaguni.okinawa.jp/docs/2018042800012/household.html>)より(2023年8月10日閲覧)

- 久部良で沖縄本島の言語の影響が強いことを除けば、集落間の方言差はほぼない。

2. 与那国方言について (2/4)



(白地図は<https://technocco.jp/>より)

2. 与那国方言について (3/4)

- 先行研究による与那国方言の音素体系
- 母音音素: /a/, /i/, /u/ の3つ
- 子音音素: /p/, /b/, /m/, /t/, /T/, /d/, /n/, /r/, /C/ [tsʰ], /s/, /k/, /K/, /g/, /ŋ/, /h/, /ʔ/ の16個
- 半母音音素 /j/, /w/, 撥音 /N/ (cf. 加治工1984: 333. 表記を一部改めた)。
- /P, T, C, K/ は無気喉頭化子音などと呼ばれ、/T/, /K/ は /t/, /d/, /k/, /g/ と弁別的。
[例] /Ta/「舌」 <-> /ta/「田」 <-> /da/「家」

2. 与那国方言について (4/4)

- A型, B型, C型の三型アクセント体系。
- A型は概ね高平調, B型は概ね低平調で, C型はA型に似るが後続するアクセント単位のピッチを下げる(上野2010)。
- 複合語では2単位形が多く見られる(上野2014, 2015)。



<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A8%E3%83%8A%E3%82%B0%E3%83%8B%E3%82%B5%E3%83%B3>

C C
ajami habiru 「ヨナグニサン」

7

3. 問題の所在 (1/3)

3.1. 語中での対立

- 与那国方言の無気喉頭化音は平山・中本(1964)など早くから報告あり。ただし有気の /t/, /k/ とは基本的に語頭でのみ対立。
- 語中では音声的に無気喉頭化音だが、対立がないことから音韻解釈に議論の余地あり。
- 複合語では語中でも有気の [tʰ], [kʰ] が現れる。
[例] nabirathana「ヘチマ棚」, ubukʰadi「大風」

8

3. 問題の所在 (2/3)

3.2. 促音あるいは重子音との関係

- 無気喉頭化音と関わるものとして促音(または重子音)がある。
- 先行研究によれば, 与那国方言では撥音/N/ に対し促音は音素として認められない(平山・中本1964:17, 38, 加治工1984:332)一方, 音声的には無気喉頭化音に伴って重子音が現れる(平山・中本1964:38, 加治工1984:332)。

○ 撥音/N/(ン) ✕ 促音/q/(ッ) ? [tʰ] ~ [ttʰ]

9

3. 問題の所在 (3/3)

3.2. 促音あるいは重子音との関係(続)

- 与那国方言の促音あるいは重子音は揺れや個人差が大きい。(cf. 中澤2018)
- 上野(2010)「促音と一部の撥音についてまだきちんとした観察と考察を行なっておらず」(p.2)表記は「暫定的音韻表記」。
- 促音の音韻解釈も明らかにされていない。

[tʰ] ~ [ttʰ] ~ [tʰ] ~ [ttʰ] ? [ttʰ]/qtʰ

10

4. 調査と結果

- 上で述べた点を明らかにするため, 与那国方言の現地調査を行った。
- 促音(重子音)との関係に着目しつつ, 無気喉頭化音の音韻解釈について発表者の調査データを基に論じる。

11

4.1. 調査内容 (1/3)

- 2016年12月～発表者が与那国島で行っている断続的な調査で得られたデータが対象だが, 無気喉頭化音のまとめた調査は2020年2月～3月に実施し, 2023年7月に確認調査を行った。この2回の調査データが中心。
- 調査は発表者1人で行った。本発表の分析に用いるデータは次の5名の話者から得られたものである。

12

4.1. 調査内容 (2/3)

- (3) 話者A 東迎 高健(とうげい こうけん)
1934年生, 祖納, 男
話者B 田頭 政英 (たがみ まさひで)
1945年生, 祖納, 男
話者C 前黒島民子(まえくろしまたみこ)
1946年生, 祖納, 女
話者D 崎原 用能 (さきはら ようのう)
1947年生, 祖納, 男
話者E 田原 伊明 (たはら よしあき)
1956年生, 比川, 男

13

4.1. 調査内容 (3/3)

- 方法は発表者が作成した調査票に基づく面接調査。
- PCMレコーダー (Olympus製 LS-100) でWAVE形式モノラルで録音。
- 調査は1対1で行い, 話者B, C, D, Eは録音時にAKG C520のヘッドセットを使用 (話者Aは内蔵マイクで録音)。

14

4.2. 調査結果 (1/14)

- 全ての話者で(少なくとも音声レベルで) /t/、/k/ と /T/、/K/ の対立が認められた。
- (2) /ti/ [tʰi:]「手」、/Ti/ [tʰi:]「月」、
/kuN/ [kʰuN]「買う」、/KuN/ [kʰuN]「使う」

15

4.2. 調査結果 (2/14)

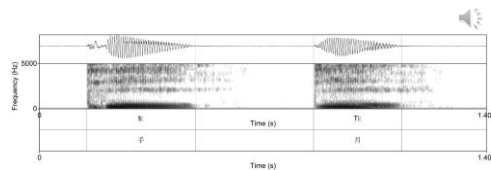


図1 tʰi「手」とTi「月」の対立(話者D)

16

4.2. 調査結果 (3/14)

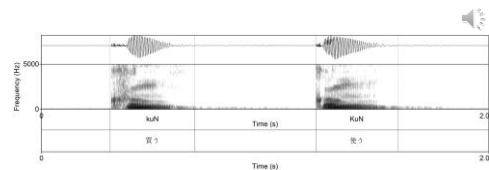


図2 kʰuN「買う」とKuN「使う」の対立(話者E)

17

4.2. 調査結果 (4/14)

- /t/、/k/は**はっきりとした有気音**として現れ、
/T/、/K/は無気音、かつ**聴覚的に緊張した硬い印象**を伴う音として現れる。
- 以下、音韻解釈の先入観を排除しつつ混乱を避けるために、**無気喉頭化音**/T/、/K/を [tʰ]、[kʰ]、それと対立する/t/、/k/を [t]、[k]と暫定音声表記する。

18

4.2. 調査結果 (5/14)

- 語中では無気(喉頭化)音として実現する。

(3) it^ʔa「板」, bat^ʔa「腹」, duk^ʔu「毒」, dak^ʔaN
「薬缶」, k^hut^ʔuba「言葉」

19

4.2. 調査結果 (6/14)

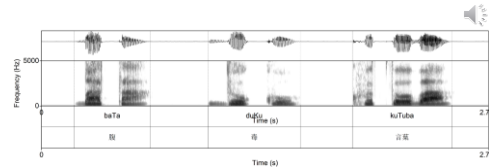


図3 bat^ʔa「腹」, duk^ʔu「毒」, k^hut^ʔuba「言葉」(話者B)

20

4.2. 調査結果 (7/14)

- ただし複合語(合成語)の場合、後部要素が [t^h], [k^h] 始まりなら語中でも原則として [t^h], [k^h] となり, [t^ʔ], [k^ʔ] 始まりなら [t^ʔ], [k^ʔ] となる。

(4) mait^hara「米俵」, sagik^hami「酒甕」,
ubut^ʔu「大人」, k^hagik^ʔuju「三日月」
cf. t^hara「俵」, k^hami「甕」, t^ʔu「人」, k^ʔuju「月」

21

4.2. 調査結果 (8/14)

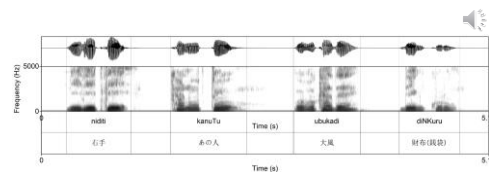


図4 nidi^h「手」, k^hanut^ʔu「あの人」, ubuk^hadi「大風」, diNk^ʔuru「財布」(話者D)

22

4.2. 調査結果 (9/14)

- さらに、語中の [t^ʔ], [k^ʔ] が重子音になる例が見られた。

(5) 話者Aの例: akk^ʔuN「いじめる」, att^ʔa「明日」,
utt^ʔiruN「落ちる」, hatt^ʔa「蜂」, hikk^ʔari
「光る」, hitt^ʔu「イルカ」, butt^ʔu「夫」, mitt^ʔa
「鶏」, mitt^ʔu「池」

23

4.2. 調査結果 (10/14)

(5) 話者Bの例: asatt^ʔi「明後日」, att^ʔa「明日」,
gakk^ʔu「学校」, k^ʔutt^ʔa「おしめ」, k^hutt^ʔja
「雄牛」, k^hutt^ʔja「鴨」, dutt^ʔi「斧」, butt^ʔai
「疲れ果てる」, mitt^ʔa「鶏」, mutt^ʔuN「全然」

話者Cの例: ukk^ʔa「借金」, utt^ʔai「指図」,
dakk^ʔaN「薬缶」, hikk^ʔa「穴」, hukk^ʔa「二日」,
hutt^ʔa「包丁」, mikk^ʔiruN「探す」

24

4.2. 調査結果 (11/14)

- (5) 話者Dの例: asatt[?]i「明後日」, att[?]a「明日」, itt[?]i「息」, itt[?]iN「一番」, gakk[?]u「学校」, k[?]att[?]iruN「捨てる」, gatt[?]iN「合点」, satt[?]ak[?]uru「砂糖袋」, sukk[?]u「法事」, dakk[?]aN「薬缶」, datt[?]i「小屋」, t[?]ikk[?]wa「西瓜」, t[?]utt[?]u「ハリセンボン」, dutt[?]u「上等」, nutt[?]i「命」, hatt[?]u「鳩」, hikk[?]a「穴」, hitt[?]u「イルカ」, hitt[?]ui「一日中」, bjukk[?]wa「甥っ子」, mitt[?]a「鶏」, mitt[?]u「池」

25

4.2. 調査結果 (12/14)

- (5) 話者Eの例: att[?]a「明日」, itt[?]i「息」, itt[?]u「鱗」, k^hatt[?]aN「親しい」, datt[?]i「小屋」, t[?]utt[?]u'iju「ハリセンボン」, hatt[?]a「蜂」, hikk[?]a「穴」, hitt[?]u「イルカ」, matt[?]ara「ツバメ」, mitt[?]a「鶏」

26

4.2. 調査結果 (13/14)

- 話者によって調査した語や語数が異なるため単純に比較はできないが、話者間で共通して重子音化する語がある一方、ある話者では重子音化していても他の話者は重子音化しない語も多くある。
重子音化は /p/ [p[?]], /C/ [ts[?]] でも見られるが今回は割愛。
- 一方で、次のような例では**全ての話者で重子音化が見られなかった**。

27

4.2. 調査結果 (14/14)

- (6) anuk[?]aN「私より」, uk[?]aN「これより」, aruk[?]aja「あるかね」, kirut[?]a「するまで」, at[?]aN「あった」, agamit[?]i「子供」, dat[?]it[?]i「小さな小屋」, ait[?]i「あつて」, kit[?]i「して」, ubut[?]ak[?]uju「満月」, diNk[?]uru「財布」, maik[?]uru「米袋」, nabinut[?]a「鍋の蓋」, uit[?]ara「上下」, k^hunut[?]i「今月」, it[?]u「いい人」, k^hanut[?]u「あの人」, danat[?]u「悪い人」, mjak[?]uN「ごみ」, Nmanut[?]a「まな板」, himik[?]i「喘息」, t[?]higut[?]i「シャリンバイ」, duk[?]u「毒」, bat[?]a「腹」

28

5. 考察 (1/12)

- [t^h], [k^h]と [t[?]], [k[?]]には有気/無気の違いが一貫して認められるため、音韻的にも /t^h/, /k^h/ 対 /t/, /k/ と解釈し得る (cf. 青井2018)
- しかし、[t[?]], [k[?]]を /t/, /k/ と解釈すると、**緊張した硬い音**という聴覚印象や、**語中でしばしば重子音化することが説明できない**。

[t ^h], [k ^h]	→	/t ^h /, /k ^h /
[t [?]], [k [?]]	→	/t/, /k/ ? [tt [?]], [kk [?]]

29

5. 考察 (2/12)

- [t^h], [k^h]を /t/, /k/, [t[?]], [k[?]] を /t[?]/, /k[?]/ あるいは /T/, /K/ と解釈するのは、[t[?]], [k[?]] の聴覚印象については説明できるものの、重子音化が起きる理由についてはやはり説明できない。

[t ^h], [k ^h]	→	/t/, /k/
[t [?]], [k [?]]	→	/t [?] /, /k [?] / ? [tt [?]], [kk [?]]

30

5. 考察 (3/12)

- そのため本発表では、与那国方言の [tʰ], [kʰ] を /t/, /k/, [tʰ], [kʰ] を /tt/, /kk/ と解釈することを提案し、その妥当性について検討する。

[tʰ], [kʰ]	→	/t/, /k/
[tʰ], [kʰ]	→	/tt/, /kk/ cf. [ttʰ], [kkʰ]

31

5. 考察 (4/12)

- [tʰ], [kʰ]が音韻的に重子音であれば、語中で重子音化するのは音声実現として自然。
- 語頭では重子音化しないが、[tʰ], [kʰ]で始まる1音節語は**母音長が短くなる**傾向があることから、音韻的には重子音と解釈できる。

(7) tʰa:「田」, tʰa(:)「舌」, tʰu:「十」, tʰu(:)「人」

/tu/ [tʰu:]「十」, /ttu/ [tʰu(:)]「人」

32

5. 考察 (5/12)

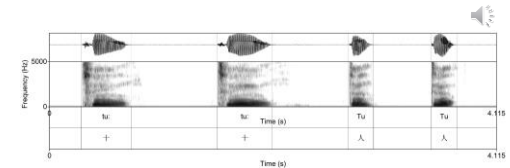


図5 tʰu「十」とtʰu「人」の母音長の比較(話者D)

33

5. 考察 (6/12)

- [tʰu]「人」は「自立語は最小2モーラを含まなければならない」(山田・ペラール・下地2013: 293)に一見反するが、**音韻的に/ttu/**であれば共時的にも反例と見る必要はない。
- 語頭の/tt/, /kk/が喉頭化する例は他方言にも見られる(西岡・小川2011, 下地2018)。

tʰu -> /tʰu/ μ μ
/tt-/, /kk-/ -> [tʰ-], [kʰ-]

34

5. 考察 (7/12)

- 語中**での喉頭化**[tʰ], [kʰ]は語頭での/tt/ → [tʰ], /kk/ → [kʰ]が語中に拡張したもので、**基底形が重子音のため**(5)のように/tt/ → [ttʰ], /kk/ → [kkʰ]となることもあると考える。
- (6)で重子音化が起きていない例を見ると、kʰaN「～より」, kʰaja「～かね」, tʰa「～まで」, tʰaN(過去接辞), tʰi(指小辞), tʰi(継起接辞)のような接辞・接語であったり、複合語(合成語)の後部要素であったり**形態素境界を直前に含む例**に集中している。

35

5. 考察 (8/12)

- 形態素境界によって語頭と同じく重子音化が阻止されるものとすれば、これらも/tt/, /kk/と解釈できる。
- (4)のように複合語(合成語)では語中に[tʰ], [kʰ]が現れるが、複合語は形態素境界を必ず含むため、**/t/, /k/の前に形態素境界がある場合は[tʰ], [kʰ]になると分析できる。**

/+tt-/ , /+kk-/ -> [-tʰ-], [-kʰ-]

/+t-/ , /+k-/ -> [tʰ-], [kʰ-]

36

5. 考察 (9/12)

- 問題は前に形態素境界がない語中の /t/, /k/ である。
- 本発表ではこれを [tʰ], [kʰ] として実現するものと見なす。
- (6)には mjakʰuN「ごみ」、Nmanutʰa「まな板」、himikʰi「喘息」、thigutʰi「シャリンバイ」、dukʰu「毒」、batʰa「腹」のように形態素境界があいまいかあるいはないにもかかわらず重子音化しない [tʰ], [kʰ] の例があるが、これを /t/, /k/ と解釈する。

37

5. 考察 (10/12)

表 本発表における [tʰ], [kʰ] と [tʰ], [kʰ] の音韻解釈のまとめ

	語頭	語中 (×形態素境界)	語中 (○形態素境界)
/t/, /k/	[tʰ-], [kʰ-]	[-tʰ-], [-kʰ-]	[-tʰ-], [-kʰ-]
/tt/, /kk/	[tʰ-], [kʰ-]	[-tʰ-], [-kʰ-] ~ [ttʰ-], [-kkʰ-]	[-tʰ-], [-kʰ-]

38

5. 考察 (11/12)

- 語中の /t/, /tt/ と /k/, /kk/ が [-tʰ-], [-kʰ-] で実現し部分的に中和するが、これは [-tʰ-], [-kʰ-] に2つの通時的由来があることを反映。
 - *asita > atta > atʰa「明日」、*patuka > pakka > hakʰa「二十日」、*putuka > pukka > hukʰa「二日」、*atukaw- > akkaw- > akʰa-「扱う」のように重子音に由来するもの (cf. 中澤2022)
 - *doku > dukʰu「毒」、*wata > batʰa「腹」のように単子音に由来するもの

39

5. 考察 (12/12)

- 本来 */t/ [-tʰ-], */k/ [-kʰ-] と */tt/ [-ttʰ-], */kk/ [-kkʰ-] とで対立していたか
- (5)の ittʰi「息」、hattʰu「鳩」のように単子音に由来するものでも重子音化が生じているように、両者が通時的に混同していることを示唆。
- 重子音化の個人差は、混同の違いの反映。

*/t/ [-tʰ-] > [-tʰ-] ~ [-ttʰ-] → (/t/ ~) /tt/
*/tt/ [-ttʰ-] > [-tʰ-] ~ [-ttʰ-] → (/t/ ~) /tt/

40

6. まとめと課題 (1/2)

- 与那国方言の [tʰ], [kʰ] と [tʰ], [kʰ] の対立を、喉頭化音素を立てるのではなく、/tt/, /kk/ と解釈する案を示した。これによって喉頭化音が語中でしばしば重子音化することが説明可能。
- 語中でも重子音化しない [tʰ], [kʰ] は /t/, /k/ と解釈し、無気喉頭化音に通時的に単子音に由来するものがあることの反映と考える。
- 語中でも緊張した硬い調音がなされるのは、重子音由来のものがあることと、語頭の調音が語中にも及んだためと分析する。

41

6. まとめと課題 (2/2)

- これによって与那国方言に促音 /q/ が認められるとはただちに言えない。
- /tt/, /kk/ に [ttʰ] ~ [tʰ], [kkʰ] ~ [kʰ] のような異音があり、/q/ という独立した音素と分析できるとは言い難いため。
- 先行研究で指摘されているように、長さの揺れは [ŋ] や一部の撥音、母音長にも見られる。
- これらの解釈については今後の課題としたい。

42

謝辞・付記

- 調査にご協力くださった話者や与那国町教育委員会、特に与那国方言辞典編集委員会の皆様に御礼申し上げます。
- 本研究はJSPS科研費JP21K12993の助成を受けています。

43

参考文献

- 青井隼人(2018)「北琉球沖縄語伊江方言の破裂音」日本語学会第157回大会。
加治工真希(1984)「8 八重山方言概説」『講座方言学10 沖縄・奄美地方の方言』289-361。
上野善道(2010)「琉球与那国方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』34: 1-30。
——(2014)「琉球与那国方言のアクセント資料(3)」『琉球の方言』38: 69-92。
——(2015)「琉球与那国方言体言のアクセント資料(4)」『琉球の方言』39: 165-193。
中澤光平(2018)「方言辞典に求められるもの—与那国方言辞典作成の現場から—」
語彙・辞書研究会 第53回研究発表会(発表資料集pp.9-16)。
——(2022)「南琉球与那国方言の撥音化と喉頭化音化: 音韻変化の条件と相対年代」『東京大学言語学論集』44(電子版): 80-101。
平山輝男・中本正智(1964)『琉球与那国方言の研究』東京: 東京堂。
山田真寛・ペラール, トマ・下地理則(2013)「ドゥナン(与那国)語の簡易文法と自然談話資料」田窪行則(編)『琉球諸語の言語と文化 その記録と継承』291-324。
東京: くらしお出版。
下地理則(2018)『シリーズ記述文法1 南琉球宮古語伊良部島方言』東京: くらしお出版。
西岡敏・小川晋史(2011)「竹富方言の音韻・文法概説」前新透『竹富方言辞典』石垣市: 南山舎。

44